

乳幼児期に於ける発声発語機能形成の研究(1)

—— シェルボーンムーブメント法による検証を通し ——

・(社会福祉法人)グリーンローズ・オリブ園 片 桐 格
(学法) ルーテル愛児幼稚園 京 野 孝 喜

1. 研究目的： 近年、乳幼児健診が定着して来た事で、1才児検診時には始語、有意語を確かめてそれが確かでない、リスク児として3才児健診時迄経過を観察されその改善が認められないとMR児とか、対人関心が乏しいと自閉症の疑いと処置されるのが一般である。即ちその語彙検査の発達の背景にはChomsky. (1968年)の生成文法説がある訳で、そこには生得的言語獲得機構Language Acquisition Device(LAD)があると言う生得説の仮説がある訳である。然し、この10年程の間に乳幼児期のコミュニケーション能力に就ての研究が活発化した結果、その新生児の段階からすでに始まる母子間の相互作用の経過の中に、既に言葉の基礎を見出そうと言う研究が推進されています。その発想の根拠は、言語発達の視点に、語用論(Language Pragmatics)の観点を取入れたものである。一般に言語発達面の二大機能である表象機能と、他は伝達機能であるが、今回は前述のように出生直後から始まる前言期と言われて来た乳幼児期の母子関係の中で交わされる赤ちゃんの音声、視線、表情、動作等のnonverbal行動が一番言語発達の基本として評価されて来たことである。従って研究主題に掲げたように現行の1才半児健診以前に、言語学習の基本としての発声発語期の発声機能と共に、母子関係を通じて伝達機能面も形成されている事が分る。従って1才半児健診以前の段階から、発声機能を始め、母子間の伝達機能の早期改善ばかりでなく、又幼児前期の段階からの早期療育指導の可能性に就て考えたい。

2. 研究方法： 出生直後の新生児期から、人の子であることによって身に付けて生れた伝達機能の芽生えを敏感に受け止め、更に注意深く母親からの情報を受け止めるのにIngram(1968)による言語発達遅滞症候群Developmental speech disorder syndromeに示唆されている両親からの体質的遺伝によると言う仮説、neuromuscular maturation即ち子どもの身体を構成する筋肉の運動神経的成熟の度合に問題があると示唆されて来た。既にその出生直後の新生児期から徴候が見い出されるという仮説である。即ち、この仮説に従って、①新生児期から系統発生的発達の機序に従って注意深く、言語発達の遅れを主訴とする母親からの情報を聴取して、これをIngramによる仮説即ち出生時からの身

体感覚(触覚)的成熟上の問題と思われる情報を整理して表1の如く出生時から乳児期を経て幼児前期に至る間の系統発生的発達から外れた発達の異常な情報を整理する。又、この異常が次第に幼児期に向って拡大され異常行動化して変容してゆくと表1右側上部端に整理した2～3才児期になって表面化する症状となる。従って表1右側に横書した初期情報と、の相互関係の有無を検討してその因果関係を考察する。

表1

発達機序 生活月齢	情動分化の仮説 K・M・Bブリッヂズによる	M・ルードによる系統 発生的運動発達シーク エンス	精神発達における 身体的作用	初期徴候 (2～3才)	整理した2～3才児 期になって表面化する 症状
36				社会化的発達 ◎自己の確立 対象関係の発達 ◎他者の判別	▲始歩がおくれた
24				(象徴機能の形成) ◎身体模倣能力の発達 (第3次循環反応 の特徴)	▲つかまり立ちからすぐ歩 いた
18				(身体図式像の把握) ◎自己身体像把握	▲四つんばいあまりしな かった
15				(表現能力の発達) ◎身体での周囲への 動きかけ(感覚イメ ージの発達)	▲母親に関心を示さない ▲テレビのコマーシャルに 関心がある
12				◎感覚・運動の循環 反応(第2次循環反 応の特徴)	▲赤ちゃんの芸もしなかつ た
9				(情動の発達) ◎内受容的感覚の分 化(漠然とした身体 感覚発生)	▲お座りして独りで遊んで いた
7				◎筋トウスの分化 第1次循環反応特 徴	▲おとなしくて手がから なかった
5				◎自動的運動	▲腹ばいあまりしなかつ た
3					▲あやしても笑わなかつ た
1					▲よく泣いてばかりいて手 がかかった
0					

3. 考察： その根拠なるのは上述したIngramによる仮説であって、結果的に3才児になっても言葉を充分発語できない原因は出生当初からの両親から遺伝的に受継いだ身体感覚的成熟過程に依るものと言う発想である。以下その仮説に従って考察を試みるがその原点となるのは、先ず、生後1ヶ月以内の新生児の場面である。即ち表1右側に横書した情報の中、最下段の2例は、それがそれが出生直後であるだけに、極めて対照的な情報であると共に、興味深い情報と言える。更に以後の乳児から1才児期に達する迄の間の系統発生的発達過程に発生する種々特異な情報は、上述のIngram

による仮説とどのように関係付けて解釈されるか本研究の中心的課題と考える。

考察(1)、新生児期に何故か「よく泣いて手が掛かる子」とこれとは正反対に「よくお乳を吸ってよく眠る子で手が掛からない子」と分かれるのか。

Ingramによる言語発達の遅れに関する原因として掲げている根拠として、その両親から受継いだ体質的筋肉の成熟上の問題としている。それが考察(1)に掲げた状況と考える時、当然それは、胎児期の無重力の状態から、この地上に誕生して一番先に受けるのが重力の加速度である。発語の遅れを主訴とする生育歴聴取の中で上述のような出生直後から約1ヶ月近い間の状況の中に、上記のような違いが生ずるのは何故かと考える。それは出生直前の胎児の状態から新生児期の間はその身体運動神経的に変化は無いものと推論しIngramの理論から①よく泣く子の例は重力の影響を過敏に全身に受け止める結果と考える。又一方②の例はその身体感覚の成熟の状態が未熟な状態の場合その刺激の受止め方が比較的鈍感な場合よく眠るものと推論する。然しこの①、②の状態はその後2ヶ月以降の成長過程でその身体感覚は何れも対外的に敏感に反応するようになるものと推論する。表1のWollonの仮説を通してその精神発達との関わりと月齢段階での右側横書きの種々の情報に就いての考察に役立てたい。例えば「口遊びも余りしなかった」「あやしても笑わなかった」の中で、口遊びは腹筋の成熟による腹式呼吸の始まりで、その結果母音の発声の始まりと考える。これは赤ちゃんの腹筋部と言う身体躯幹部の筋肉の成熟を示す重要な成長の徴候と言える。その調音期の母音の発声が顕著に聴かれないことは、その背景には、考察(1)の枠内に掲げたような身体体質的な特異性が存在したことを意味していると推論する。その成長過程も定額の段階になると、①も②も殆ど区別の付かない「おとなしい手の掛からない」或いは「育て易い子」となるのは何故であろうか。その徴候として表1、右側に横書きにした徴候の中で、「口あそびも余りしない」「あやしても笑わない」とか、又その後「腹這いも余りしなかった」「お座りして独りで遊んでいた」とか「TVのCMに関心があった」と云う状況になっていくのが一般である。この段階でM. ルードによる系統発生的運動発達のシーケンスの場面での生後4～5ヶ月の段階での反り返り運動をするのが一般であって、この運動の繰り返しによって、腹筋の成熟が認められる。その結果として「口遊び」、即ち母音の発生と言う調音期に達

したと評価されるのが一般である。然し出生当初の身体運動感覚的成熟の遅れの結果として口遊びも余り認められなかった、と云う結果になり、その後の喃語も低調になると言う結果になる。そうした状況の中で、自然と母子関係も低調になり、「赤ちゃん芸もしない」とか「母親に関心がない」然しその反面「TVのCMには関心がある」と言う結果になる。この因果関係を考察すると、前述の母子関係の低調な背景には又、赤ちゃん自身が生来的に持つ、身体感覚的成熟に関わる触感覚の過敏性が背景の要因になって、TVやVTR等の干渉しない機器には関心があるが母親には着かないと言う結果になると考える。

考察(2)、上述して来た出生時に認められる身体感覚的成熟の特異性が、その乳児期を経て始語の遅ればかりでなく、幼児期の異常行動になってゆく、その理由を考察する。

①上段の考察(1)の中で、Ingramの仮説を通し、その新生児期、乳児期を経てその母子関係の低調な結果となり、更に以後の身体感覚の過敏の原因となってい対人関心の成長を妨げる結果となる。これは幼児期の言葉の発達を促す、伝達機能の未熟成の原因ともなる。更にその母子関係を通して学習してゆく、乳児期からの喃語の発生が未熟なままに日本語特有の母音の発声を妨げる結果となると推論する。その反面、早くからTVやVTRに結び付き易いのは上述のような、対人関心の消極的な結果と推論する。更に②乳児期中盤での「反り返り運動」の低調を通して腹筋中心の呼吸機能の形成を妨げるばかりでなく、以後の胸式呼吸形成場面で「お座り」以後の「腹這い」「四つ這い」等による周囲の環境を模索することも低調になり、その結果として腹式、胸式呼吸の統合化の未熟となって2才代になっても発語が難かしい原因となると考える。

4. 結論；上述の考察を通して、幼児期の生育歴聴取の段階で、母親の妊娠中、或いは周産期、又、その乳幼児期に格別な事故がないと「定額」「お座り」「抱り立ち」「始歩」と比較的簡単な聴取で終わるのが一般である。又更に発達検査を試みてその現在の状況を中心に発達を評価し勝ちである。演者が幼児期の言語発達を援助する目的から、その表象機能面だけを注目するのではなく、出生後からその乳幼児期の状況を聴取すると共にIngramの仮説を基本として乳幼児期を経て2才代に至った経過を検証して来たもので、更にそれを次の演者の発表を通し身体運動機能の発達面から検証を試みたものである。